



アンサンブル・フォウ・ユウ へのご招待

会員

松本 操 < 41 期 >



もう、今から20年位前に遡るが、司法試験に合格後、全く見知らぬ土地の名古屋に修習が決まっていたある日、1通の手紙が私の元へ届いた。

手紙の主は弁護士青木仁子とあった。私の記憶に誤りがなければ、縦書きで3つか4つに折りたたんだ仰々しい書簡だったと思う。その内容は、“名古屋修習に決まりおめでとうございます。ついては名古屋法曹バロックアンサンブルへようこそ”というものであった。どうしてこの弁護士先生は、私がヴァイオリン弾きであることを知っているのか不思議だったが、後で聞いたところ、修習生27名全員を勧誘していたことがわかった。実に熱心な話である。

そして、私は名古屋入りし、はじめから決まっていたかのごとくアンサンブルのヴァイオリン席に座り込み、以来20年経った今も未だに名古屋のアンサンブルと旧交をあたためている。

さて、法曹合奏団が名古屋にあるのになぜ東京には存在しないか。これは不思議だとの声も一部にあったが、要は東京に音頭取りがいなかっただけの話である。

それまで会派の活動も皆無であった私が、たまたま2004年度に柄にもなく法友会の文化担当の副幹事長なる大役をおおせつかった。旅行総会の宴会の仕切りの悩みから出発した“プロジェクトX”はメーリングリスト法友オールで披露させてもらったが、実のところ私の真のプロジェクトは東京にも弦楽アンサンブルを作ることにあった。宴会係は門外漢であるが、オーケストラなら任せたいとの思いからである。

こうして“災い転じて福となす”の格言どおり、めでたくアンサンブル・フォウ・ユウが東京に誕生したわけである。

人はなぜ群れをなすのか、その理由は様々である。ひとりでは淋しいから、抵抗勢力と対決するため、出世の

足がかりにしたい、とか色々ある。この点、オーケストラの場合、人が集まる理由は単純にして明快である。

ひとりじゃ音楽にならないからだ。その結果、指揮棒の下に人々は群れをなすのである。

そうだとすれば、その群れの構成メンバーは前科前歴があろうがなかろうが、何だっていいわけであるが、一応法曹関係者によるオーケストラということで特色をだそう。ただそれだけのことであって、やっている内容は市民オケと全く変わらず、ひたすら西洋古典音楽の追求である。

現在、団員は約30名で、もちろん法友会会員は10名もおらず、第一東京弁護士会、第二東京弁護士会の会員に加え、裁判官、法学部教授、そしてその仲間達に助けられ構成されている。基本的に月1〜2回の練習で、合宿も行っている。

2006年の11月末、法友会の60周年記念パーティーで演奏する機会を与えてもらったが、その時のインタビューで今後の目標は何ですかと聞かれ、ひとりでも多くの法友会会員、そして東弁、一弁、二弁会員や裁判官、検察官と一緒に音楽をすることだと答えた。

いずれは日弁連の全国会員でフルオケの演奏をすることだと答えようとも迷ったが、大風呂敷を広げる前に少しでも足元を固めていきたい。これが本音である。

ひとりでも多くの同志が入団し、極上のカンタービレな演奏が一緒にできればと思っているので、志のある方は是非お申し出下さい。団員一同お待ちしております。

◎第4回演奏会のお知らせ

日時：2007年7月7日(土) 午後1時30分開演予定

場所：セシオン杉並

曲目：モーツァルト「クラリネット協奏曲」

シューベルト「交響曲第5番」 他